

# 自叙伝の研究と自叙伝による研究

— 第一報 —

岡部 彌太郎

はしがき

ここに報告しようとするものは標題の第一報である。この報告は二つの部分に分たれる。その一つは自叙伝そのものに関する研究であり、その二は自叙伝を材料として研究したものである。前者についてはなおいろいろ研究したいことがあって、当然後に補われ、書きなおさなければならないのであるが、これが第一報である関係から一応予備的な記述をして見たものである。後者に属する問題は多々あり順次に発表して行きたいのであるが、ここに報告しようとするものは私の集めた多くの自叙伝の中から、基督教主義大学四つの学生のものについて、その宗教に関する部分を見ようとしたものである。今この四大学をA B C Dと名付けることにするがAはカトリックの男子大学、Bはカトリックの女子大学、Cはプロテスタントの男女共学の大学、Dはプロテスタントの女子短期大学である。この四つの中A、B、Dの三つの資料は昭和二十九年度の前半に書かれたものだけを用

自叙伝の研究と自叙伝による研究

いた。Cについては同じ年度のものがないので昭和三十年度の前半に書かれたものを用いた。この資料を整えて見るためには、聖母カテキスタ会の修道女ヒルデガルデ吉川房枝氏の非常な援助を得たので記して感謝の意を表したい。

## 一 自叙伝の研究

人を理解するのに、その人の生活の歴史を知ることが必要であることは当然のことである。が、私はその必要を特に痛感した事例を持っている。昭和四年六月二十九日に東京市内の一公立小学校の五年生Kが母親につれられて相談に来た。主訴は「一体この子供は頭が良いのでしょうか悪いのでしょうか」ということであった。小さい時から頭は良いように見られていた。小学校に入学して一年の時、受持の先生はこの子供は大変頭が良いから一年に置くのは適当でないと行って二年に進めてくれた。二年の学業も何等むづかしいことはなく、成績もよく勉強しておった。ところが母親の仕事の都合からこの母子は東京を去って地方の都会に移った。子供はその市の一小学校に転入学したのである。ところがそこでの受持の先生はこの子供を生意気だと見た。こうなった理由は東京の学校で一年の時の受持の先生が、この子供の頭が良いなどおだてて学年を進めたりしたことによるのだ、として彼を年齢相当の学年に下げってしまった。その時からこの子供は勉強もしないし、学業もできなくなってしまった、というのである。相談に来た当時は再び東京に帰って来ていたのである。知能検査をして見ると知能指数は一四六と出て来た。ターマンの天才とした領域にはいっている。頭は良いに違いない。なお念のために

アチーヴメントテストも用いて見た。黙読検査と算術検査とをして見た。これらの検査には一般的な標準点数は出ていなかったけれども、相当に知能程度の高い中学校一、二年のそれぞれの平均点数が出ていた。彼の成績はこの中学校の二年の平均点数を超えていた。これだけ見たら頭が良いと結論することは差支えないばかりでなく、そうせざるを得ないのである。

この当時の相談においても個人の生活の歴史について調べないのではなかったが、その方は組織的ではなかった。なぜ頭が良いのに学業の成績が少しもあがらないようになるかというような点について適確な判断を下し得るところまでは行かなかった。Kについては、ある先生からすすめられた某学園の中学に進みたいがどうだろうという問があったのに対し、私もその学園を知っていたので賛成して置いた。

それから五年が経過した。私は相談をして五年以上を経過した事例が丁度五〇たまったので、それらの人々に質問の手紙を出した。一、その後の学校経歴はどうであったか。二、職業経歴はどうであったか。三、学校あるいは職業で特に優れた才能を現わしたものがあるか。四、学校あるいは職業でどんな故障に出遇ったか。五、近況一般、をきいてやったのである。

それに対するKの返事も来た。彼は私のところへ相談に来た翌年、小学校の五年を修業しただけで前に話のあった某学園中学部第一学年に入学していた。しかし二学年の後半に職業につくためにそこを退学し、市内の夜間中学の二年に転じた。三学年の終りからは休学し、結局一年遅れて又三学年に戻ったが、同年中に夜間の商業学校に転じ三カ月に満たぬ中に又退学、私に答えた時には「爾来今日に至るまで独学中」としてあった。職業経歴

の方は昭和七年の一月に「〇〇省給仕拜命日給五十銭」から毎年日給三銭宛昇給して、「爾来今日に至るものなり」としてあった。三の学校あるいは職業で特に優れた才能を現わしたものの、四の学校あるいは職業で出遇った故障、五の近況一般については彼の返事をそのままに出して見よう。

「三、学校あるいは職業で特に優れた才能を現わしたもの

イ、学校、得意な学科は幾何、物理、歴史

ロ、職業関係、給仕拜命当時は模範給仕として上の人から見られていました。

四、学校あるいは職業で出遇った故障

イ、学校、中学時代は英語が苦痛でした。日本人に英語が必要なはずはない等と誤った見方をしていました。が今日は、英語は現代においてはまだ普及されていませんが近き将来において必ずや世界各国標準語となるものであるという事を誤認かもしれません、思うようになりました。しかし今も英語の勉強は怠っていません。

ロ、職業方面、生れた時からといってもよい位勝負事の大好きな、又その方面は何でもやれば必ずものにする方です。ならばますと、麻雀二段、玉突二本(一百点)、聯珠(田舎初段)、将棋(少しへボの方です)、柔道一級、剣道三級、其他カルタ、ボート、スキー、スケート、花札、トランプ、大抵娯楽物と名のつくものはやっています。

そのためにはいった当時模範給仕だった私も、その悪癖のためぐんと評判がわるくなり、悪い方から数えられ

るようになりました。しかし私としては至極のん気で嘘と勉強と女が嫌いの方であります。他の人から見るとやはり他の給仕が勉強家だけに一寸変に考えられるのでしょうか。

## 五、近況一般

はいった時は模範給仕として賞められ、しばらくたつと悪い奴といわれましたがこの頃は反省しまして段々と評判もよくなって来ました。少し物心でもついたのでしょうか、どうも生来短気の私は喧嘩でもするとすぐ相手をポカポカッとやっちまう方ですが、この頃すっかり落ちついて参りました。相手をなぐる前に、相手がなぐられてどんな感情を抱くかとか、なぜ自分が怒ったか等々考えますと実にくだらない原因なんですから振り上げた拳もすぐ下ろしてしまいます。又近頃、ベートーベンとかバッハ、モーツアルトといったような古典派系統の音楽が好きで毎日のように聞いております。勝負事は一切やりませんし、酒は勿論下戸の口ですから、それに仕事の余暇には少量の勉強も出来るようになりましたし、これから一層ふんばって行くと思っています。

先生の名をはずかしめるが如き行為はいたさぬつもりですがもし今日お返事しました中にそういうような事がありましたらピシピシといて下さいませ、直ぐあらためますから。私は嘘はきらいの方でしてこゝに書いた事はありのままですし、こんな前後六枚にわたる手紙もかいた事はありません。うそ字もずい分あるでしょうし、下手な文章でお読取りにくう御座いましょうが何分十七歳（数え年）の少年の事とて御容赦にあらずかりたい次第でございます。段々と寒い気候が近づいてまいります。母と共に先生の御健勝の程お祈り申

上げます。では又何か変わった事でも御座いましたら御相談申上げます。ではさようなら」

これは自己を語る手紙として中々優れた価値の多いものと私は思ったが、さらに別に母親からの手紙があって傍から本人を明かにするために光を投じてくれたのである。これは本人の手紙より二三日遅れて来たものである。これも抜萃してみたい。

「(前略) 先般Kへ御提出下され候御尋ねに対し遅延乍ら漸く御回答申上げ候様子に御座候。御覽下され候通り誠に香ばしからぬ状態にて母一人子一人の身の只々本人の成功をのみ祈り居り候私には言葉に尽せぬ憂慮の日を重ね参り居り候。

〇〇先生の極力の御すすめあり又先生も同様御すすめ下されし事とていろいろ都合致し〇〇学園受験致させ候処幸い見事一位の成績にて入学を許可せられ、学園先生方にも望を持たれしにて候へ共何分にも遊びたき最中と一つには注入主義の学校より自由主義の学校に移りし為勉強するよりは遊びの方に興味多く小学時代には学ばざりし語学は独学にては入り難く殊にその方面に優れし生徒の居りし事なども負けず嫌いの本人に興味を失はせ殆んど省みざる状態にて一学年を経過、二学年に進みし頃語学教授法の御上手な先生が見えられ大分興味も湧き諸学科の独学法にも馴れ参り候折柄家事の都合にて中途退学又劃一主義の〇中夜学に転じ候ためと役所方面の役人達の娯楽の流行に引かれ、お役所にては給仕として頭は上らず候へ共娯楽の方面ならば対等にて勝負を争ふ事の出來得る事も手伝ひ生來の得手を發揮してさうした方面にのみ没頭し夜学は何れも長続き致さず今日に到り居り候

有様(中略)

娯楽にふけり乍らもその中心には勉強だけはして置かねばといふ精神はあるらしく何かの折には幾分それが頭をもたげる様子には候へ共その折が過ぎ候へば又々下火となりやはり娯楽方面にのみふけり居り候（後略、文字仮名遣い原文のまま）」

この後私はKに役所から東京大学の方へ移ってもらった。そして私のしていた仕事の助手をさせながら彼を観察した。しかし彼について最も多く知り得たのはやはり彼の書いたものによってであった。彼は二年位私の手伝をした後、学内の他の部署に移り、半年後には止めて、謄写印刷の注文を取ったり、自ら印刷をしたりした。それからある印刷会社にはいって「社長の絶大な信任を得、旭日昇天の勢」であったと私に通信して来たが、病の侵すところとなって早逝した。彼は比較的若く結婚したので一男子が残された。その子供が三才の頃祖母の手紙を持ち、未亡人とKの従兄とにつれられて又私を尋ねて来、検査をし若干の助言をした。その時私はKの従兄にいろいろ質問することによって、はじめてKについての全体が理解されたように思った。Kの従兄の説明は勿論重要なものであったが、Kの人格の主なものはこの引用した彼自らの記述と、母親の解釈とによく表現されている。Kの事例に関する徹底的な研究報告としては以上の敘述は勿論不十分である。それは別個の問題として置かなければならない。がここでは特にテストによるものと対比して自叙伝的なものの価値を私が強く印象された例として述べて見たのである。

この事例を経験した後、私は自叙伝を好んで求めるようになった。幼児教育に関する講義をする時は、よく試験の一部分として、あるいはレポートとして学生各自の幼児時代の回想を書かせた。又生徒指導についての講義

をした時にも自叙伝を書かせた。殊に教育心理学の講義に関連して、最初に自叙伝を提出させて置き、講義が終つて試験をする時には前に提出した自叙伝の教育心理学的な解釈をさせることを試験の一半とするようにして来た。

私の経験はジョンソン博士の言葉「すべての人間の生涯が最もよく書かれ得るのは彼自身によってである」を容易に肯定する。ヘッベルの「わが幼年時代」は彼自身の幼時の経験を全く具体的に面白く書きあらわしている、そしてこの記述は又児童心理学の資料としても重んぜられている。ルッソーの「懺悔録」によってわれわれはよく「ルッソーという男」を知ることが出来る。ミルの「自叙伝」オーエンの「わが生涯」フレイベルの「自伝」等は皆それがあるためにその人をよく知ることの出来るものである。

けれども自叙伝で偽りの叙述がなされることはないであろうか。これは勿論問題である。眞実を叙述させるあらゆる用意がなされなければならない。既に書かれたものについては読んだところで眞実感と作為感とが感ぜられる。作為感を感じながら読み進んで行くうちに、この叙述は「詩と眞実」であると告白しているものにも出遇う。実験的条件を備えてではないが、私が眞実感を感じたものを学生に読み聞かせて、それは眞実と感ぜられるか作為的なものを感じるかを問うたことがあったが、一致して眞実であるとの答があった。こういう点についても更に詳細正確な実験的検討をして見たいと思う。

筆者自身は眞実のままを書こうとしても、それを眞実という点で不完全なものとする理由が六カ条あると、ア  
ンドレー・モロアは言っているそうである\*。それは



一、自然的な忘却

二、意識的な忘却

三、不愉快なことを本来抹殺しようとする精神の作用

四、羞恥心、遠慮

五、記憶の合理化

六、自分ばかりでなく、自分に近いものをかばう気持

である。これらも詳細に検討して見ると面白いものであろう。そして自叙伝を書かせる場合の用意如何によつてはかなりこれを防ぐことも出来そうである。自叙伝が決して悪用されることがなく、本人を理解するためと心理学的研究のためのみに用いられ、全くコンフィデンシャルに取扱われると知った場合には、上記の四番目や六番目は除き去られるとも考えられる。羞恥や遠慮を感じながらも客観的に事実を書こうとする努力がよく認められる。私は学生の自叙伝ははじめから私が頂戴するのだと断つて置くが、ある種のものについては私が保有して置くよりも筆者に返した方がよいと判断し返却した場合もある。

自叙伝を書かせられるのが非常にいやだという学生もある。しかしそれは甚だ少数のようだ。そのいやな理由についても探求の必要があるであらう。これに反して自叙伝を書くことに興味を示す学生は非常に多い。真実の一個の人間というものは比いなく面白いものなのである。後にも述べるが私は自叙伝をよく書かせるために実例を読むことにしている。それに対しては息をひそめた関心が示されることがある。実例をこの位にして置こうと

しても、もっとと要求されることがある。そして私の定めた提出期限までにはある年令時期までを第一部として書いて出し、第二部、第三部と、過去の客観的資料を探し出し用いて書いてくれる場合も少くない。中には自叙伝を問題にすることは「個人的なこと」に関する不要な関心だという学生もいる。これは市井において人の噂ばなしに興ずることを道徳的あるいは礼儀の上で不可であるとする一つの態度をここにも適用しようとするものであるが、自叙伝を通して人を理解する問題とは一寸ずれている考方である。勿論ここには自叙伝を取扱う倫理というものが存する点において大いに違ふところがある。ただ、ずれてはいるが、そこに共通のもの、人格に関する共通の面白さのあることまで私は否定しようとは思わない。

自叙伝の質の問題と共に実例を読んで聞かせるかどうかこれがこれに関係して来る。私の初期に集めたものの中には、充分に自己を書き表わし得なかつたものも多かつた。私はそこで模範的なものを読んできかせる方法を取つた。するとだんだんに書かれる自叙伝の質が向上して来た。ウォアターズは彼女の「カウンセリングの技術<sup>\*</sup>」という書物において、中学生や高等学校生に自叙伝を書かせる仕方を述べた後に「……しかしながら型式や実例は提供すべきではない、なぜならばそれらは表現を自由にするよりもむしろ塞いだり型にはめ込んだりするものだからだ。」と言っているが、あるいは中学生や高等学校生ではそのようなかも知れない。しかし大学生の場合においては、よい実例は大いに彼等の表現を自由にするのに役立つ。真似をしようと思つても材料が違うから内容において真似することは出来ない、真似るのは、あるいは教えられるのはその態度である。真実な態度、客観的な態度、それでいて自己の希望や、価値の置きどころや、感情やを自由にそして豊かに表現する態度というものが

学ばれるようである。よい実例を読みきかせることによって、この教年来私の集める自叙伝の質はめっきりよくなって来たように思う。そして全体の質が向上すればその中から優れた模範を取り出すことが出来、そこには善循環とも言うべきものがあるように見られる。提出された自叙伝を読んではから学生を見るともうそれ以前の個性のない何か多少ぼやぼやした男子学生女子学生ではなくなる。いずれも豊かな内容を持った一個のパーソナリティとして重んじなければならぬものになってくるのである。

自叙伝の書かせ方については先きに、模範例を読むことに関して私が反対の意見を述べたウォォアターズのものが相当に参考になるものと思う。それを紹介する前に、自叙伝がだんだんに多く用いられるようになって来たのではないかと考えさせることを彼女の書からうかがって置こう。彼女は一九四六年には「今日の高等学校生徒指導<sup>＊＊＊</sup>」という書を著わしたが、そこには自叙伝のことが少しも出ていない。しかるに彼女の一九五四年の著「カウンセリングの技術」には自叙伝に関することが四カ所に出ている。その二〇六頁以下にはこういうことが書いてある。

「多くの学校においては新入の学生に自叙伝を書かせることが習慣になっている。時には学生は下級の学校を卒業する少し前に自叙伝を書く。彼等はそれらが、彼等の将来のカウンセラーやホーム・ルームの教師に送られるであろうことを告げられ、彼等自身についてはすべてを書くようにすすめられる。これらの作文は次の学校の教育者に新にはいつて来る学生についての知識を与え、又学生の作品の一例の提供する。

「しかし普通には自叙伝の要求は新しい学校で英語の教師によってなされる。学生も承知し同意することによ

って自叙伝は彼等のカウンセラーのところに廻され、そこにファイルされることにもなる。……

「時には自叙伝は英語の教室においての代りに集団指導の教室において書かれる。」と、

自叙伝の他に個人に関しては、その家族、家庭、旅行、健康、仕事の経験、教育等に関して詳しい質問紙の書き入れをさせる場合もある、これも一種の自叙伝であると言えるが、それとここで問題にしているような自叙伝とどう関係するか、どういふように自叙伝を書かせたらよいかについては彼女は次のように言う。

「学生に関する諸事実の知識が別途に得られる時（前述質問紙などによって）には、自叙伝は学生の外的世界に関する事実を確かめるといふよりも、むしろ彼等の内的世界の理解を求めするために用いる方がよい。学生の内的生活、即ち彼の願い、憧れ、偏見、要求不満、葛藤、希望、及び主観的な諸衝動に関する事実を知ろうとするのであったなら、学生が比較的自由に流れ出るような叙述をすることが大切であって、書くべき問題が定まっていたり特殊な質問によってあまり構成的になっていない方がよいのである。

「多くの学生にとっては彼等の生涯の全体について書けという一般的な要求をし、そこで彼等の思うままに書かせたら充分である。しかしある学生にとってはかような指示はあまりに漠然としていると思われようから、その時にはもっと明確なものが必要であろう。もし次のような二種類の資料が必要なのだとして学生の注意をひくならばそれはすべての学生に役立つことにならう、（一）家族、学校、遊び仲間等における経験や、近隣、教会その他どこでも社会での関係に関する客観的資料、（二）どういふことに満足を見出したか、好き嫌い、憧れ、価値ありと思うもの等に関する主観的な資料、がこれである。学生の書くべき自叙伝の種類を理解させるには正式な

教授によるよりも集団的な討議による方が普通には役に立つ。(ここに先述した実例を読むことに対する反対がはいって来る。)一年に一度より多く自叙伝を書くことは要求すべきではないが、学生が最上級になったら再び自叙伝を書くことを求めるのが望ましい。最初に書かれた自叙伝と二度目に書かれたそれとを比較すれば、どんな型の成長をしたか、社会的適応や情緒的成熟がどれだけ多くなったか、興味や鑑賞においてどんな変化があったか、自己及び他人の理解がどれだけ増したか、一般に成熟に向ってどれだけ進歩したかを示してくれることがあろう。……

「自叙伝はこの妥当性や信頼性に関して、個人的資料に関する質問その他の自己報告などと同じような限界を持っている。又、他の場合と同じく、自叙伝の妥当性と信頼性は一部分はどんな条件下にそれが書かれたかによって決定される。学生が安定を得ており幸福であれば彼はより充分にそして正確に報告することが出来る。しかし学生がより不幸であり不安定であれば、彼は空想や合理化や同一視やその他の諸機制を用いてより多く自己を保護しようとするであろう。そして学生にその生涯の話を書かせる人がカウンセラーであり、学生がその信頼するカウンセラーと彼の書いたものについて討議する機会を持ち得るのだということを知れば、彼はその特別な必要や関心についての正確な診断によく役立つような自叙伝を書き得るであろう。」

ウォアターズは学生という言葉をここでは用いているが、大体において中学の上級から高等学校生徒に関して言っているものである。けれどもかなりの部分が大学生にも妥当するものと思われる。

註。

\* André Maurois: Aspects de la Biographie, 1928 にあるという。岩波講座世界文学中に杉捷夫氏の書いた

「書簡」日記「自叙伝」の五頁より引用

\*\* Warters, Jane: Techniques of Counseling 1954

\*\*\* do : High School Personnel Work Today 1946

## 二 自叙伝による研究 (その一)

### —— 基督教主義大学々生の宗教 ——

はしがきの中にも述べたように、ここには基督教主義の四大学A、B、C、Dの学生の自叙伝からその宗教をとり出して見ようとするものである。

最初には統計的なことを述べる。ここで材料になった自叙伝はいずれも教育心理学をとった学生の書いたもので、A大学では男子学生六六名、B大学では女子学生二八名、C大学では男子学生一〇名、女子学生一九名で計二九名、D大学では女子学生四〇名、全体では男子学生七六名、女子学生八七名で、総数一六三名である。

次に各大学別に統計的なことと宗教の特徴とを見て行くことにする。

A大学はカトリックの男子大学である。六六名の学生の大部分は経済学部と文学部に属する。その宗教状況をみると、

両親がカトリックであり、幼時からの信者

四名

両親がプロテスタントで、幼時からの信者

一名

大学入学前カトリック受洗者

七名

大学に来てからのカトリック受洗者

一名

大学入学前宗教に関心を持った者

四名

大学に来てからキリスト教に関心を持った者

五名

一時マルキシズムに近づいた者

六名

キリスト教に縁故のあった者

三名

仏教徒

自叙伝の研究と自叙伝による研究

## 二名

特に宗教にふれていない者

## 三三名

となっている。この分け方はその主な特徴に従って分けたもので、人数の上からは重り合いのないように取扱つてあるが、事実においてはそのいずれに属させてよいのか重り合いのあるものがある。例えば「家は真宗、高校時代真理を求め歩き、一時マルキシズムにも興味をもつ、現在カトリックに抛りどころを得んとするに至る」と要約される者は勿論大学に来てからキリスト教に関心を持つに至った者に入れてもよいわけであるが、ここでは一時マルキシズムに近づいた者の中に数えた。同じ一時マルキシズムに近づいた者の中には「高校一年マルキシズム、キリスト教（プロテスタント）に関心を持ち、卒業後カトリック信仰を望んだこともあるが、大学に来て熱情を失った」と要約されたようなものもある。即ち「マルキシズムに近づいた」という表現を代表的にとつたものであるが、「左翼的となり」も「マルキシズムをふりまわした」もこの中に入れたのである。その後は「カトリックに関心をもち研究中」のものもあり、「再び無神論となる」ものもはいつているのである。キリスト教に縁故のあった者というのは幼時カトリックあるいはプロテスタントの幼稚園に通って影響を受けたことだけを書いたものである。仏教徒というのは明白に仏教徒であるものを言っているもので、その一人は「住職の子、中学四年で得度、カトリック大学で矛盾を感じない」としてある。

以上によって見ると、明かにカトリック教徒である者二名、一八％であり、それに略同数の信仰を望んでい



る者、抛りどころをカトリックに求めている者、カトリックを研究中の者がいて、A大学がカトリック大学たる特性はかなりはっきりしていると見てよい。ここには基督教主義大学に対照させるために無宗教の国立大学々生の場合の統計を示すに至っていないが（資料の数に至っては基督教主義大学々生の何倍かがある）その印象からすれば一%のカトリック教徒もないようである。

一人一人の人格の形成を見て行くことはここでは出来ないが、宗教に関する叙述の若干の見本を見ることによつて、内容の方面をうかがうことにしよう。

両親がカトリックであり、幼時からの信者といえども、いずれも苦難の道をたどつて来ている。

その一例、定期には英文で自叙伝を出しているが、後に「補充的未完成自叙伝」を更に出して来た。「今年のはじめに自叙伝の作成を命じられた時も全くの自己を虚飾することなく紙表に現わすことを思い立ったが、資料が充分でなく、どうしても現わさねばという欲求が今程強くなかった。」しかし「現在はどうしても表現し尽さねば動きがとれぬので」自己改良の動機づけの役割を先生に果してもらうために、自己を救わんが為に記すものであるから「全く虚飾のないことを断言」するという。「小学校四年頃家族皆で教会に行き、真夜中に十三大橋をタクシーで帰ったことがあります、たしかイースター・エッグと袋入りの菓子を買った筈です。その時のフランス人のB神父様は太平洋戦争中憲兵に連れて行かれ殉教されました。真白な長いひげをすごいては『上げようか』とか『大きくなったら神父になりなさい』とか言われていたが。」「神学生生活を始める。」「情緒の不安定性より来る人格の社会的不適応」「神学生を辞し休学、帰郷」「経済学部へ復学」「英文科へ転科」「日本の社会に

生れたキリスト教徒の悲劇」等の見出しが若干の彼の苦難を示すであろう。

他の一例、両親は熱心なカトリック信者、「信仰的な雰囲気の中で生活してきた。兄弟仲よく朝晩の祈りを共にし、規律正しい生活が送られた。併し満州事変後になると宗教迫害がひどくなり、この美風も中絶のやむなきに置かれた。」

大学入学前にカトリックの受洗をしたものもいろいろである。この前年の自叙伝の中には全然無宗教の家庭から、宗教を求めるに至り、はじめプロテスタント、それから進んでカトリックに至り、神学生となった非常にすばらしい叙述があったが、この年にはそれ程すばらしいものがない。一例のみあげる。

「私は学校に行くよりも新聞部に行つたと言つてもよい程新聞の仕事に熱中した。」「寄宿舎にいるとき最大の収獲、それは信仰を持つようになっていたことである。」「中学三年の時カトリックの求道者が入寮し、高校二年生だったが成績もすばらしく、人格も優れてこれに惹かれた。」「自分の姉はプロテスタントの洗礼を受けたが全然信仰といわれる程のもでなかった。それでも教会へ行けと勧めていた。」「はじめ特別深い興味があったわけでもない。ただキリスト教とはどんなものかを知つても悪くはない、又彼の人格に惹かれるものがあったので、教会につれて行つてもらつた。公教要理の研究を始めた。神なんか在るものか、と思つていたものの、研究して行くうちに、神の存在は当然のことのように思え、教理の勉強が終ると、洗礼を受けるのが当然のように思え、当然の事をするものとして洗礼を受けた。」「求道期間一年九カ月、疑問が全くなかった、というわけではない。」「当然の事として洗礼を受けた私は、シンに何らの感動も見出さなかった。興奮もなかった。何故洗礼を受けた

かと尋ねられて、何故君は洗礼を受けないのかとしか答えられない程、私には当然の事と思えた。しかしこの何故洗礼をうけたかという問が、好きな新聞生活と全く畠違いの哲学へ私を追いやった。」

国立大学の学生の自叙伝には社会をいかにすべきか、社会はどうあるべきかというようなことが情熱を以て問題とされているという特徴がある。一時マルキシズムに近づいた者のうちにマルキシズムとカトリックの対決というような問題を徹底的に取扱ったものがあるかというに、残念ながらない。「高校卒業後二年間、実社会に勤め、大人の世界の矛盾から正義感に馳られ、共産党員に積極的に近づいたこともあるが、単に友人としての交際に終わったのは今考えてほっとする、安堵感と共に、もう少し冒険して経験をして置くのも悪くなかったなと思うこともある。」というのがせいぜいのところである。

B 女子大学は文学部だけである。二八名の中

両親カトリックで幼時からの信者

三名

母がカトリックで幼時からの信者

一名

大学前カトリック学校の影響で受洗した者

二名

カトリック学校へは行かなかったが大学入学前のカトリック受洗者

自叙伝の研究と自叙伝による研究

三名

プロテスタントの家庭からカトリックへ向いつつある者

三名

大学に入学する前から宗教特にカトリックに関心をもつ者

二名

大学に入学してはじめてカトリックに関心をもつに至った者

二名

キリスト教に縁故のあった者

三名

特に宗教にふれていない者

九名

となっている。ここではカトリック信者が九名、三二%であり、カトリックに向いつつある者、関心をもつもの併せて七名、A大学の場合よりも更にカトリック大学としての特性がはっきりしている。

両親ともカトリック信者で生後間もなく受洗した一例、

「赤児の時に洗礼の御恵をいただいたことを私は幼い頃から誇りとして心から感謝している。」「小学校一年の時外国から日本に帰って来てB大学と同じ学校の初等科に移った。小学校五年の秋北海道の伯父の家へ疎開、仏

教や神道と共に、多くの迷信が信じられ、いろいろ変った習慣があり慣れるには相当時間がかかった。」終戦の翌年復校、中学、高校へと進む。「他の学校と異り沢山の厳しい規則があり、きびしく監督されていた。自身これを忠実に守り、友達にも守らせようとして敬遠されたが、マゼースや先生方には勇気があるとほめられ、励まされ、自分の確信する道を真直に進んだ。」卒業（高校の）の時の級友のオートグラフの一つに、「貴女はあまりにもホーリーで、そして真面目すぎたので、皆に好かれてはいなかったけれど、心の奥底では恐らく貴女を尊敬していたのだと思います。」とあり、もう一つもホーリーと真面目を言い「熱心な、強い意志の持主……けれど、もう少し融通性が貴女にほしいの」とある。大学に入ってから「各人が異った考え方によって自由に行動することの価値がわかりはじめ、周囲に影響されない本当の自分になるよう努力している。」という。

カトリックの信者であったものは、公立の小学校でいずれも苦い目にあっている。一つは「三年生の頃学校で担任の先生が『神棚や仏壇のないお家はありません。もしあったとしたらそれは日本人じゃありませんね』と言ったので悲しくなり、わからなくなって家へ帰るなり大声で泣きながら母に話した。母は床の間の十字架をさして『だれよりも正しい神様の祭壇があるじゃないの』と教えられたのでほっと安心した。それから友達に『アーメン、アーメン』と行ってからかわれてもそう悲しく思わなかった。』という。もう一人は「小学校二年のある時、担任の先生が『毎朝神棚を拝まない人』とお聞きになった。」「先生がそれ以後変な目で見るような気がしたし、先生の強制にひどく反感を持った。母にはこのことについて話したかったが、悪いことのような気がしたので一口ももらさなかった。相当長い間この事について悩んだ。」というのもある。もう一人、「小学校に入った頃

からおうむ返しのカトリックの教理問答がはじめられたが、見ることも感じることも出来ない神、まるで神話やお伽話のように話される天地創造の模様など、みな不思議な信じ難いものばかりだった。一方に現人神として教えられる天皇、天皇の日本の国土創造の神話と、カトリックの教える全能の神と、神と天地創造の関係が、同じような権威をもって押しつけられ、この二つのドグマの間にはさまり何をどう信じてよいかわからなかった。母にそっと聞くと、『学校では教会のことは黙っていらっしやい』といわれただけであり、優等生、模範生として折紙をつける先生の前にもこの疑問は打明けられず、『始めのない神』の存在の理解に苦しみつつ、『しかしカトリックの空気を吸って育ったものには、わからないからといって疑うことはもっと恐ろしい大それた事に思えた。信じられぬ心と、そうした疑いに対する大きな不安と恐怖、家族のゆるがぬ信仰へのねたみを感じ、『神がもしないとしても信じていて損にはならぬ』という消極的な、むしろ否定的な信仰に良心の苛責を覚え、事々に罪の意識におびやかされた。』と、同じ事柄がそれぞれの少女に異った悩みを感じさせたのである。この最後の学生その後を心配なさる方もあろう。中学校へ進んでもこの苦しみが続く、この時カトリックの一司祭がこの不幸を発見し徐々にうまく治療をしてくれたという。「以後、人生を肯定すること、信仰に生きるよろこび、共に理解し助け合って生きる楽しい努力に、生のよろこび、若さの希望、人生の理想を見出した。与えられる立場から与える立場に立とうとしている自分は、残り少ない学生生活を、現在の一瞬一瞬に全てをかけて、自己をつくることに努力している。子供のよき友、理解者、指導者としての母になれるように。」と、言っている。

他にも無宗教の少女がカトリックの学校の寄宿舎にはいり、多感な叙述の中に、自己の宗教的関心と青年とし

での成長とを取扱った優れたものがあるが、省略せざるを得ない。

C 大学は男女共学、男子一〇名、女子一九名分であるが、ここは教養学部のみである。男子について、

両親共にキリスト教徒であり幼時からの信者

二名

両親はキリスト教徒ではないが、子供のキリスト教徒となるのに好意的であった者

二名

中学の時はじめてキリスト教にふれ、高校で受洗、キリスト者として現在に至る者

一名

高校の頃キリスト教への関心が高められ、受洗するに至ったが現在神から遠くなっていると感ずる者、但し復帰の期待をもつ

一名

高校の頃キリスト教への関心が高められた経験のある者、キリスト教信仰の希望をもつ

一名

大学に来てはじめてキリスト教にふれた者大学及びキリスト教への批判をしている

二名

宗教のことにはふれないと（宗教問題があまりに自分にとって重大だから）ことわっている者

一名

となっている。ここでは学生数が一〇名だけなので統計的なことが充分意味を持ち得ないが、あえて他の場合と同じように取扱うならば、現在キリスト教徒としての自覚の確かにある者五名、五〇%であり、他の五名も何等かの意味で深い関心を示している。充分に基督教主義大学としての特性をもっているものと言える。

女子について

クリスチャン・ホームに生れ、大学入学以前に受洗している者

二名

クリスチャン・ホームに生れ、大学において受洗した者

一名

クリスチャン・ホームでなく生れ大学以前に受洗した者

一名

クリスチャン・ホームでなく生れ、浪人時代に宗教を求め、大学において受洗した者

一名

クリスチャン・ホームに生れ、幼児洗礼を受けたが、現在まだ信仰の域に至らない者

一名



クリスチャン・ホームに生れ兄は牧師になっているが受洗するに至らない者

一名

母がクリスチャン、大学に来てからクリスチャンたることを望んでいる者

一名

母がクリスチャン、教会にも通ったが、高校三年以来遠ざかっている者

一名

キリスト教を信仰しているが受洗していない者

三名

カトリックの学校からこの大学にはいつて来た者、人生、信仰について考えている

一名

中学時代からの生に対する疑問がこの大学にはいつて解決されたという者

一名

この大学ではじめて宗教的経験をもった者、まだ信仰にはいつていない

一名

キリスト教に縁故のある者

三名

自叙伝の研究と自叙伝による研究

家庭が仏教であるというだけの者

一名

となっている。ここではいろいろな場合を大まかまかくあげることになったが、両親共にキリスト教徒であっても、必ずしも幼児洗礼を受けさせないし、幼児洗礼を受けさせても信仰告白までは必ずしも行って行かない、母はクリスチャンでも必ずしも子供をクリスチャンにしない、という現在のプロテスタントのやり方がそのまま現われている。この点はカトリックの場合とかなりはつきり違っている。大学に来てから受洗した者、キリスト教徒となろうとしている者のいることもあるいはこの大学の特性を示しているかも知れない。明らかにキリスト教徒である者は五名、二六%であるが、洗礼を受けないでキリスト教を信仰しているという者あるいはそれに近い表現をしている者が別に四名ある。

男女学生を合して見ると明白にキリスト教徒である者一〇名、三四%である。そして略同数のものがキリスト教に積極的な関心を示していて、無関心だと認められるものは甚だ少数である。これはキリスト教主義大学たる特性を充分にあらわしていると言つてよいであろう。

C 大学においても、幼時からの信者必ずしも順調ではない。「信仰的な変遷を書くためには省略できぬ種々の事実を詳述することが苦痛であり、結局それは果し得なかった。書いて残るといふことが何よりも嫌で（資料としてそれでは不完全だというなら直接話すことは出来る）ある」といふ。

幼時キリスト教幼稚園に入れられ、キリスト教徒ならぬ母の奨励で小学校の時から日曜学校に精勤し、修身な

どとの矛盾を薄々は感じて深く苦しまず、中学では熱心に教会に通い、三年生で受洗、「素朴で純粹な信仰を  
持っていた」学生もある。「友人はどんな不良な奴ともよく友達となれた。彼等は根はいい人間で、むしろ気が  
弱いのに驚いた。」という。高校時代「何でも判ったようなふりをして政治問題や社会問題を論じて騒ぐこと  
は反感を持ち、聖書の註解書や思索的なものを読んだ。」「高校三年間日曜学校の教師もした。」「しかし性に関し  
ての悩み苦しみもあり、浪人してからはいろいろな疑問を抱いた。C大学にはいって経済学を勉強し始めたが、  
二年生の時に牧師になる決心をしたという。C大学においてはいろいろな事柄が「私の変化に影響していると思  
うが余りに複雑で今すぐには整理して書けない」という。私の拔萃は甚だ拙いが、宗教的人格のだんだんに作ら  
れ大きくなりつつあるものを感じることが出来る。

個人的な宗教意識と共に社会の問題と宗教とを関係づけている学生もある。「私は自分の住む工場街の場所柄  
もあって社会悪については認識をわりあい早くからもっていた。高校の頃から世界史を学んで世の中を広く見る  
ことが出来るにつれて、社会問題にも多く関心を引かれた。私は世の中の不平等がキリストの教に反すると考  
え、社会主義的な考えに向った。そしてキリスト教社会主義という言葉を社会科の教科書で見つけてひどく気に  
入ったことがある。私は友達と信仰のことや社会問題についてよく議論をした。しかし社会と信仰者の態度との  
問題は未来への課題として解決はいつも前方に置かれている。」「私は一生の仕事にこの社会の不合理をなくす社  
会科学の研究とその成果を次の世代に伝える教育を考えている。」「国立大学の学生の代表的な問題の一つが社会  
の問題である、私はここにはじめて社会の問題がキリスト教との関連において大学生の意識の焦点に持ち来され

ているのを見、大いに意を強くするのである。

C 大学を批判している学生もある。彼はその自叙伝の終りの方に自己の概観として「私という人間」をまとめているが批判者を知る上において必要なものであろう。「民主主義信奉者、男女同権論者で全ての物の考え方は現代的だが、何か過去の日本的伝統がひっかかりになり、ガール・フレンドと社交ダンス場に行き、あるいは映画、銀座、ジャズ音楽、LPレコードをききつつコーヒーを飲むといった生活に素直にとびこめない。アプレでもアバンでもない一つの時代の断層にある人間、同年者（現在二十五才）で戦死したものはないから時代的にはアプレだが、その育った文化的背景や時代はアバンであり一つの忘れられた世代である。」という。C 大学については「本学の生命であるキリスト教も私をひきつけた大きな要因である。私はキリスト者ではない。しかし『いつかキリスト教と対決しなければならぬ』とは私の昔からの宿願である。……何時の日か、私も又キリスト者として『私は神とキリストを信じます』とはっきり言える日があるいは来るかも知れない。しかし又来ないかも知れない。」C 大学に入って二年数カ月、今にして思えばC 大学は私の来る場所ではなかったように感じられる。それはキリスト教のためではなく『インターナショナル』がここでは『文化的国籍』を失わせはしないかという気がするからである。国家的エゴをなくすのはよいが、民族的特質、民族文化まで失われそうな近代的『鹿鳴館』の感じ。学生の中には外交官志望者が非常に多いが、それよりも外交官が代表する日本の社会的に虐げられた階級のために働く人が沢山あってもよいであろう。「大いに同感であるが、私のC 大学の自叙伝の代表者、前の三名はいずれもそういう志をもった人々なのだ。同じ人によるもう一つの批判、「無一物たれという教

を信じつつ実生活では富める者であり、しかもその矛盾を苦悩とし、懺悔し、祈り、己を責め、なお且つ現状維持派であるとすればこれは巧妙な欺瞞というものではないか。……C大学に修養会があり夏休みになると箱根、軽井沢、群馬の避暑地で会合する。聖書を読んで敬虔な宗教生活をし自己修養に努める。聖書を読むことに少しも異存はない。然し何故箱根軽井沢に行くのだろう。」と、批判者の気持はよくわかる。しかしそれはC大学の修養会の事実にしてよく妥当するや否や。何しろこの批判者の如きは他の大学に見られない、堂々たる批判の態度で、いかにも大人の如くである。

もう一人の批判者はC大学の生活のすべてには満足していない。例えばキリスト教について何か場違いのものを感じている。「チャペルの片隅で説教者の話すのをきく時、私の耳にはそれが何か私達の住む世界から遠くかけ離れたありがたい言葉としかひびかないのである。こうした時私の頭の中にはいつも月島で働いていた時に接した無知で貧しくはあるが、毎日を懸命に生きている労働者の姿がある。そして私にはコミニズムの方が、大衆自身の具体的な問題にふれあっているのではないかという疑問を捨て去ることが出来ない。……現在はっきり言って私は無宗教だというのが一番正しいであろう。対話する神、祈りの言葉をもって呼びかけ得る神の存在を信ずることが出来ないからである。従ってC大学の目的が『神と人とに奉仕する人間』を養成することにあるならば『人に奉仕する』自覚しか持ち得ない私は、C大の生活に半分の存在しかもっていないと言えるだろうか。」と。人にもみ奉仕せよ、徹底的に。人の子が栄光の座につく時この批判者は王の右におかれ、「よく神に奉仕した」と賞せられて驚くことであろう。

C大学の女子学生の自叙伝は実に詳細で内容豊富である。殊に特色のある点はC大学の生活について多くのことを書いている点である。国立大学の女子学生の自叙伝では、その大学への入学ということがクライマックスをなして、大学入学後の生活については誠に記述が乏しいのと対照的である。それだけ若干を挙げるといふのでは不十分である。が止むを得ない。

クリスチャン・ホームに生れ、育った者にも疑が生じ悩みがあることは他の場合と同じである。その一例、「熱心なキリスト者であった祖父母、信仰によって結ばれた父と母の祈りの中に生れた。完全なキリスト教的雰囲気」に育ち、日曜学校は一度も休まなかった。どのようにささいなことも全て神の恵であり、罰であると考え、そしてこの神は全くイエスと同一人物であった。「(外地にて) 戦争の急激な発展と共に貧困者が増え、学校の往復に捨子が死んで行くのを見る頃から、神について疑問をもちはじめた。小さい時からきかされ続けた神は愛だとか義だとかいう句が大嘘のように思えて来た。しかし当時はまだ純心で、このようなことに神が気がついておられないのだと、祈りの中に神に事実を訴え助けを祈った。」「(内地にかえて) YWCAに加わり、又毎朝の礼拝を通し、宗教というものを真向から真剣に考えはじめた。」「優等生にえらばれた自分は大きな自信を得てずい分傲慢な態度を示しはじめた。『YWCAは生半可な宣教師の御気嫌とりの集りだ』といさぎよく脱退した。新聞部、演劇部で働いた。」「しかも教会さえ、弱者の集りだとして全然顧みなかった。周囲の人からは小さなあやまちをも教会に行かぬ故と皮肉を言われたが……苦痛にも感じなかったという最もおごり高ぶった時期であった。」「中三の終りに尊敬する祖母が死に、臨終に『謙遜であれ』と自分に言いのかされた言葉がきっかけとなり自分

の高慢であるという意識に絶えず悩まされ続けるようになった。」「C大学入学以後キリスト教は私にとって第二次的なものとなって行った。……キリスト教の精ずいである隣人愛とか恵みとかいうものを言葉としてのみ受け入れ感じなくなって行った。その事実は何の罪も感ぜず『宗教飽和状態に育ったため、今更キリスト教の教義なんてそのようなものはもう私の内に法式化して駄目なのよ』と他人にも言い自分でも思い込んでいた。このような状態にも長く止ることは出来ずに次に完全な神よりの逃避を試みた。その結果はどうだろう、遂に逃れ切ることは出来ず反って堅く捕えられ遂に今年の復活節には堅信札を受けるに到り救われた。……『人もし渴かば我に來りて飲め……我を信するものはいつまでも渴くことなからん』……おろかさの故に一つ一つの事をなす個々の場合にはたまらぬ絶望を感じても根本には神による、神に愛されている事実、御一人子イエスの十字架による罪の贖を信じつつ喜の中に日々を送っている。』

幼児洗礼を受けたままの一人はどのようなか。「予備校時代の友人の影響もあり、社会問題について考え、科学的な目で社会や人間を見るようになる一方宗教に対する関心も高まり、時々バイブル・クラスにも出て見た。」「個人の救いは宗教に頼る他ないことがわかった。だが果して宗教だけで現在の社会悪、もっと直接的にいて戦争の恐怖を除くことは出来るであろうか。私には疑問に思える。中国が共産主義化して以来、今迄の卑屈な中国人の人間性が改革され、そこに新しい時代の新しい人間像を見る時、そこに何らかの真なるものを見出すことが出来るような気がするのである。勿論こういった現在の中国の社会においても個人としての悩みは解決されていまいであろう。そこに宗教のはいる余地があるのではなからうか。……現在の私にとっては真の意味のク

リスチャンになることが重要である。ブルナー博士の講義など通して宗教の必要性を痛感し、頭ではっきり神の映像を見ることが出来るのであるが、信じるにはまだまだ心の準備が足りないことを痛感する。クリスチャンになることによって自分の心を改造し、次に社会を改善して行くことに力を尽したいと思っている。」

はじめてキリスト教に接したものの一例、「家が不熱心な仏教者なのでC大学に来て始めて宗教の経験を持つわけであるがまだ信仰にはいっていない。C大学にはいるために改宗した人のあることを聞いて憤然としたものであるが、私の性格を知っている友から、C大学にはいったからクリスチャンにならなくてはいけない等とはもっての他であるが、それだからといってキリスト教に対して一生懸命心を閉じていることのないように忠告を受けた。それは確かに守らねばならぬ言葉である。」という。

ここは男女共学であり、一面はなやかなところがあり、学生の自叙伝は誠に多彩である。ガール・フレンドもボーイ・フレンドもデートも恋愛もあるであろう。がしかし宗教的経験も又豊富で深いものを持っているものも多いように思われる。

D大学はプロテスタント、女子の短期大学で、この資料となった学生数は四〇名であるが、保育科のみである。他の大学の学生の場合は第三学年が最も多く、四学年のものがこれに次ぎ、少数の二学年があるだけであるが、ここでは全学生が第一学年に属している。それだけ年も若く自叙伝の書き方にも若干幼稚なところがあり、叙述もC大学の女子学生などに比べて、割り切った物の言い方をしている。そこで分類も比較的簡単になる。

クリスチャン・ホームに生れ信者たる者



一〇名

クリスチャン・ホームとはっきりしないが、家庭、幼稚園、学校の影響で信者たる者

七名

中学高校時代に教会に行きはじめ受洗した者

九名

中学高校時代に教会に行き、信仰を得たという者、信仰の素地が出来たという者

三名

キリスト教に縁故のある者

四名

キリスト教に縁故もあるが、宗教について未解決だという者

二名

仏教、神道等家庭の宗教にのみふれている者

三名

宗教に全然ふれていない者

二名

である。さきにくこの学生の叙述が割り切ったところがあると言ったが、それははっきりしたキリスト教徒の数

の多いことにも関係をもっているであろう。それは二六名で、六五％に当たっている。顕著なキリスト教徒の学校であると言ってよい。ここでは卒業までに学生を出来るだけキリスト教徒にしようと努力する。そして卒業生の大多数がキリスト教幼稚園で働くようになるのである。

D 大学での例、「両親ともクリスチャン・ホームの出で、自分は四代目に当る。」「三歳の年のクリスマス、サンタクロースのお爺さんの話をきき、自分のことを憶えていて欲しいと、一生懸命良い子になろうとした。クリスマスの前日、会堂のクリスマスに行き、実際サンタクロースを見て、白い袋からお菓子をもったり、ゲームをしたりした。」「小学校一年の時、父は天皇を神と認めないキリスト者として一年四カ月の間投獄された。」「我人生において最も愛すべき恵泉に入学出来た時の喜びは又格別だった。私の精神修養は実に恵泉生活の六カ年に在ったと言っても過言ではない。私は何でも喜び感謝する子供、何でも祈る子供、何処にあっても明るく、そして人のために尽すようにと教育された。」「美しい光栄ある卒業式を終え、恵泉に入学して以来目標として来たD（母の母校）の保育科に入学出来た。」

もう一つの例、「高校三年の夏、山中湖で全国教会高校生修養会があり、これは自己を革新せしめた意義あるものであった。信仰をもつことは決して社会からの逃避であってはならないことを教えられた。そこで今までのような逃避的な考えからではなく、信仰の上に立った、クリスチャンにふさわしい保母になろうと決心し、新たな気持でD短大にはいった。高二の時信仰告白をしたが、当時は希望にあふれた、しっかりした気持で受けたのだが、今考えると全く浅い気持でしてしまった。再び信仰告白の機会が与えられるよう一心に励んでいる。」

もう一つの例、「仏教幼稚園に四年間通う、年中行事は節分、お花祭り、七夕祭など様々あった。」尼さんの先生もいた。「私はもともとその尼さん先生がやさしくていい先生だけど、頭をまるめて墨染のお着物を召していらっしやるのが、何となく近よりがたく感じられ一種の尊敬の念と恐しさの入り混った変な気持でその先生を見ていた。」「朝ごとに食前の感謝として『われらは仏の子供なり嬉しい時も悲しい時も……』と宗教的な歌をうたいお目々をつぶって『いただきます』をしたのを忘れることが出来ない。この時は、がさがさした気持もおさまり気持よくお食事がいただけだ。」「中学二年になって……弱い自分、しかも弱いままではたまらぬ自分を見つめることが出来、日曜学校の先生のお話も真剣に聞けるようになって来た。父は若い時、人生とは何ぞやの問題の究明に志し、哲学、宗教殊に仏典、聖書にこれを求めて苦しみ、断食までして修業したが悟り得ず、ついに現在信仰している『生長の家』に救われたとの証しを度々した。私の父に対する尊敬と、宗教に対する熱意はいよいよ加えられたのであった。」「中学三年、小学校五年の時から通っていた日曜学校で、受持の先生から、もし決心がついたら受洗してはというお勧めを受けた。その時にはよく熟慮し、真に祈り、今までの私の悪の性質、例えばわがままとか、性格的に自意識過剰とかを考え、それより出る行為のすべてを反省したつもりで、この罪の身も霊も主に捧げ、主の僕となろうと決心して夢中で受洗してしまったのであるが、……多くの解決出来ぬ問題につき当っては一つ一つ悩んで悩んで、悩みぬく、まだ罪を多く持つ者であるが、とにかくキリスト者になれたということは非常な恵と、今に至ってしみじみ感じている。」「高校一、二年夏休には高校生ワーク・キャンプに参加、浜松では農園の道路作り、姫路では保育所の運動場作り、土手くずしを行い、キリスト者とは？ キリスト

者の実践はいかにあるべきか？ キリスト者の眞の靈的生活と交わりとは？ という三つの愛を中心とした問題に對して、大いに希望的体験をなし、確信ある解決を得た。」「このようなキリスト教的奉仕の眞の意義を、実践を通して与えられたのは高校時代の最大の喜であり、これが大いなる原因となって今の保育科を専攻せしめたのである。」

先きにも述べた如く、ここは一年生であるのと六五%のキリスト教徒を持っていることと保育科という将来の目標が比較的一定していることから、キリスト教に関しても單純平明な色彩が見られるようである。

## 要 約

筆者は生徒や学生を理解する上に彼等の自叙伝を求めることが役立つものであると強く印象されている。今まで多くの自叙伝が集められたが、最近数年は筆者が大学において教育心理学を講義する始めに自叙伝を書かせ、学年の終においてはこれに教育心理学的な解釈をさせることにしている。その自叙伝については妥当性や信頼性の問題があるが、どうしたならば妥当にして信頼することが出来る自叙伝を書かせることが出来るかを考えて見た。筆者は眞実感に満ちたよい自叙伝を模範として読むことが、年々自叙伝の質を向上させるに役立つことを見出した。自叙伝は個人の理解に直接役立つが、又それを資料として多くのことの研究にも役立つことが出来る。

その一つとしてA B C Dという四つのキリスト教主義大学の学生の宗教を探ぐって見ることにした。C大学の

資料は昭和三十年度のものであるが、A、B、Dの三大学の資料は昭和二十九年度のものである。Aの資料は男子六六名、その中一二名がカトリック信者で一八%であり、Bの資料は女子二八名、その中九名がカトリック信者で三二%、C大学は男女共学、男子一〇名、女子一九名の資料で合して二九名中一〇名がプロテスタントキリスト者で三四%、Dは女子短大で資料は四〇名、その中二六名がプロテスタントキリスト者で六五%となっている。全体を合して資料は一六三名分でありその中キリスト教徒数は合計五七名であって、三五%に当る。これは国立大学などに比して非常に多いキリスト教徒の割合である。

各大学からそれぞれ若干の例を取って敘述の紹介を試みた。それぞれに特色がある。国立大学の学生にとって社会思想が目立った問題であるが、キリスト教大学の学生にとっても、宗教は個人の問題だけでなく社会をどうするかの問題となっていることが看取出来る。